Dissertation and Theses (2019)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/317

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

(3) 2019年度 提出論文

〈博士論文〉

器楽研究領域

大久保理紗　フランツ・リストの《幻想交響曲》ピアノ・スコア研究
——演奏者の視点から見たリストの編曲技法——

要旨：本論は、フランツ・リスト Franz Liszt（1811～1886）が編曲を行ったエクトル・ベルリオーズ Hector Berlioz（1803～1869）の《幻想交響曲》ピアノ・スコアを対象として、演奏者の視点からその独自性の一端を明らかにし、リストの編曲技法に新たな光を当てていくという試みである。

本論は4章から構成される。

第1章では、リストの編曲家としての活動に焦点を当て、その生涯を概観した。

第2章では、リストの編曲における名称について、特に「アレンジメント」「トランスクリプション」「ピアノ・スコア」に着目し、19世紀の音楽書とリストの書簡を読み解くことで、改めて各概念が何を指すかを考察した。これまでのリスト研究においては、「アレンジメント」という包括的な概念の中に、厳密な「トランスクリプション」と自由な「パラフレーズ」が存在する、というアラン・ウォーカー Alan Walker の説が一般的に受け入れられてきた。しかし本論によって、リスト自身が「トランスクリプション」という語をかなり広い意味で使用していたと考えられることが明らかとなった。それに加えて、リストが提唱した「ピアノ・スコア」に関して、19世紀に盛んに行われていた「Clavier-Auszug」とは明確に区分けされるべきものであったことを再確認した。

第3章では、ベルリオーズとリスト、それぞれの《幻想交響曲》の成立について、歴史的資料をもとに概観し、その後リストのピアノ・スコアの出版史を整理した。

第4章では、ベルリオーズの自筆譜とリストのピアノ・スコアを演奏家としての視点から比較考察することによって、このピアノ・スコアにみられるリストの編曲技法の独自性を浮き彫りにした。ベルリオーズは自らのオーケストレーションに強いこだわりを持っていたが、そのような独自の管弦楽の響きを再現するため、リストは発想標語を楽譜の随所に記し、演奏者の意識をそこへ向けるよう促していた。

また、リストの編曲技法について、原曲の管弦楽法の「再現」のための工夫、響きの面での配慮、ヴィルトゥオーソ的な技法による演奏効果、物理的問題への対処、リストによる音楽的な解釈、という5つの観点から分析した。リストのピアノ・スコアに対する基本的な姿勢は、原曲を「神聖なテクスト」とみなして厳

正に編曲を行うことであったが、その一方で、彼はピアノにおける「演奏可能性」のための現実的な解決策を模索していた。ここでは、リストがピアニストとしての合理的な配慮を以て運指の問題に対処しつつ、時には独自の音楽的アイディアも取り込みながら、管弦楽曲の音響的、音楽的特性を可能な限り再現しようとしていたことが明らかになった。

さらにこの章では、シューマンの評論にみられるリストのピアノ・スコア評を手掛かりに、著者のピアニストとしての知見を交えながら、《幻想交響曲》ピアノ・スコア演奏論を展開した。

この作品を演奏する者に求められることは、オーケストラ曲の色彩の豊かさや各声部の書き分け、響きの奥行きなど、その音楽的な特性をピアノ演奏の中に追求するという姿勢であろう。これを実現するために、ピアニストはさまざまなタッチやペダリングを模索し、ときには楽譜に書かれている指示に背くことすら必要とされるかもしれない。ピアニストが鍵盤上で様々な探求を行い、そしてこのピアノ・スコアの持つ多くの演奏上の困難を乗り越えることによって、ピアノ演奏の新たな可能性が拓かれるのである。

リストによる《幻想交響曲》ピアノ・スコアは、ピアニストにとってピアノ演奏のさらなる可能性と表現を突き詰めるよう促すひとつの芸術作品であるとともに、ベルリオーズの《幻想交響曲》の初期のアイディアを伝える役割を担っているという点において、貴重な歴史的資料ともなり得るものである。

OHKUBO, Risa: A Study of the Piano Score of "Symphonie Fantastique" by Franz Liszt: Liszt's Transcription Techniques from a Performer's Perspective

（Dissertation: Doctor of Music, Kyoto City University of Arts, 2019.）

Abstract: This thesis focuses on the piano score of "Symphonie Fantastique" by Hector Berlioz（1803–1869), as transcribed by Franz Liszt（1811–1886). It is an attempt to clarify the uniqueness of this piano score from the perspective of a performer, and to shed new light on the transcription techniques of Liszt.

The thesis consists of four chapters.

Chapter 1 gives an overview of Liszt's life as a transcriber.

Chapter 2 focuses on the three terms involved in the process of transcription that Liszt used often: "Arrangement," "Transcription," and "Piano Score." I reconsider these concepts by reading Liszt's letters, as well as music dictionaries of the 19th century. In previous Liszt studies, Alan Walker's theory that both strict "Transcription" and free "Paraphrase"

co-existed within the general concept of "Arrangement" has been widely accepted. However, I point out that Liszt himself seems to have used the term "Transcription" in a fairly broad sense. In addition, I reaffirm that the term "Piano Score" that Liszt proposed should be clearly distinguished from the "Clavier-Auszug" that was popular in the 19th century.

Chapter 3 reviews the reception history of Berlioz's "Symphonie Fantastique" and Liszt's arrangement of the work based on historical materials. This chapter also explains the publishing process of Liszt's transcription score.

Chapter 4 highlights the uniqueness of Liszt's transcription techniques by comparing his piano score with Berlioz's manuscript from a pianist's point of view. Berlioz had a strong conviction on the orchestration of his works; Liszt made various expression markings throughout the score; to lead the performer's attention and tried to recreate the "Berliozian" sound.

In addition, Chapter 4 analyzes his piano score from the following five perspectives: general ideas for "reproducing" the orchestral sound of the original music; considerations regarding the sonority of the piece; pianistic effects using virtuosic techniques; dealing with hand/arm difficulties during the performance; and musical interpretations by Liszt. His basic attitude toward the piano score was to treat the original music as a "sacred text" and transcribe it strictly. Nevertheless he also sought realistic solutions for the sake of "performance possibility" on the piano. This chapter reveals that Liszt tried to reproduce the acoustic characteristics of orchestral sound as much as possible, while dealing with fingering problems that must be considered for the pianist, sometimes inserting his own "new" musical ideas in the process.

Furthermore, this chapter develops performance guidelines based on my own knowledge as a pianist, by using Schumann's review of the piano score as a clue.

Performers of this work should take an attitude of pursuing the musical characteristics of the orchestral music, such as the richness of the color of the orchestral sound, the division of each voice, and the depth of sound, in the piano performance. To achieve this, they may need to look for various touches and pedaling choices, and sometimes to even exert some freedom in interpreting the score. Exploring countless possibilities on the piano; and

overcoming many difficulties of this piano score; opens up new possibilities for piano performance.

In conclusion, the piano score of “Symphonie Fantastique” is a work that encourages pianists to explore countless new possibilities of expression for piano performance. It can also be regarded as a valuable historical material because this is the only surviving evidence of the early version of Berlioz’s “Symphonie Fantastique.”

〈修士論文〉

器楽専攻

出口　青空　ブラームスの 1886 年トゥーン滞在期間周辺における作品の類似性および歌の重要性

——歌曲とヴァイオリンソナタ第２番の比較を通じて——

要旨：ブラームスは 1886 年のトゥーン滞在期間に、さまざまな歌曲および室内楽作品を創作した。本論文では、ヘルミーネ・シュピースに宛てた二つの歌曲とヴァイオリンソナタを比較し、この時期の作品における歌の重要性を考察する。

福田　彩乃　サクソフォンの重音奏法における分類の可能性を探る

要旨：一括りにまとめられている「重音奏法」を分類することは可能なのか、スペクトログラムと周波数スペクトルを見て検証した。その結果、6 つのタイプに分類することができ、タイプごとの効果的な使い方が判明した。

声楽専攻

板橋　亜胡　ドビュッシーの《抒情的散文》における詩と音楽

——モチーフによる象徴的表現を中心に——

要旨：本論は、ドビュッシーが作詞作曲を行った《抒情的散文》の詩と音楽との関連性を、ドビュッシーの生い立ちや、影響を与えた出来事や芸術家と、歌曲における作曲観に着目しながら分析していくものである。

内山歌寿美　オペラ《トスカ》におけるトスカのライトモティーフの象徴的意味

——テクストと管弦楽法を中心に——

要旨：本論は、プッチーニが作曲したオペラ《トスカ》のテクストと管弦楽法に着目することによって、「トスカのモティーフ」と各楽器の象徴的意味を読み解くものである。

廣田　雅亮　チャイコフスキー作曲　オペラ《エフゲニー・オネーギン》に関する考察
——音楽によるオネーギンの心情表現を中心に——

要旨：これまで多くの研究者がタチヤーナの音楽に注目してきたが、本論では《エフゲニー・オネーギン》のタイトルロールであるオネーギンに焦点を当てて、チャイコフスキーが彼の心情をどのように表現しているかを考察する。

松尾　　咲　彼方への憧れ：「ミニョンの歌」への付曲とファニー・メンデルスゾーンの歌

要旨：ゲーテの「ミニョンの歌」に対する多くの作曲家による付曲を比較分析する。特にファニー・メンデルスゾーンの歌に着目することで、詩と音楽との関係を、ロマン主義における女性の表象と女性による表象との関係に即して考察する。

宮尾　和真　日本の合唱における合唱団員の歌唱に対する意識の考察
～独唱と合唱の歌唱時における意識の違いから～

要旨：合唱を歌う際に意識し注意される点は、同じ声楽分野である独唱の時とどのように異なるのか。合唱を歌う際の、独唱時には見られない意識から合唱歌唱時の特有の傾向を考察する。

宮後　　優　声の重力：《ラ・トラヴィアータ》のヴィオレッタと３人のソプラノ歌手

要旨：この論文では、ジュゼッペ･ヴェルディが作曲した、オペラ《椿姫》のヴィオレッタのアリアをとりあげ、国籍、年代そして声質の異なる三人のソプラノ歌手がこの曲をどのように歌唱しているかを比較分析した。

〈卒業論文〉

音楽学専攻

桒田　　萌　大阪のプロフェッショナル・オーケストラにおけるマネジメントの現状と問題点に関する考察
——京都、金沢との比較をもとに

要旨：本論は、大阪におけるプロフェッショナル・オーケストラの運営に関する課題を明らかにし、今後の方針を提案しようとするものである。

　プロフェッショナル・オーケストラは、収支構造の問題で事業を行うだけで経営が成り立たないという問題を抱えている。特に大阪における４つの楽団は、全国的な文化庁からの楽団への補助金の削減や、地方自治体による極めて少ない補助金、また大口のスポンサーが不足していることから、財政的な困難を抱えている。課題解決の方法の一つとして、大阪の民間における楽団のブランディリティ

確立や関係性の構築が必要だと考える。

そこで、まずはプロフェッショナル・オーケストラの経営に関する事柄を概略的に説明する。次に大阪における文化史的土壌を整理する。そして楽団の現在の状況、そして活動拠点である大阪に内在する機会や脅威のSWOT分析を行う。そして、「我が街のオーケストラ」のイメージを確立している京都市交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢を比較対象とし、同じく文化史的土壌の整理とSWOT分析を行う。比較後は在阪オーケストラのSWOTクロス分析を行い、「大阪」における楽団の方向性への提言を試みたい。

山本恵利佳　音楽経験とオリーブ蝸牛束反射の関係
――ピアニストとヴァイオリニストの違いに焦点を当てる

要旨：近年、オリーブ蝸牛束反射（MOCR）という現象が内耳の蝸牛を保護しているのではないかと考えられており、音楽家は非音楽家よりもMOCRが強いことが示唆されている。MOCRと音楽経験の関係について検証した先行研究では他の楽器に比べてヴァイオリンを専攻する学生でより強いMOCRが観察された。本研究ではヴァイオリン専攻のMOCR強度が強いことを再検証するために本学音楽学部のヴァイオリン専攻、比較対象としてピアノ専攻の学生に実験参加を依頼した。また先行研究では、音楽経験がないという条件を満たす参加者が少なかったため、音楽家と非音楽家の比較はできていない。そこで美術学部と外部の学校の学生にも参加してもらった。参加者には実験の前に歌唱、音楽指導と練習、リスニング態度、子供時代の音楽経験の4項目について質問紙調査を行い、美術学部では音楽経験がないか、少ないと判断した参加者のみMOCRの測定を行った。

音楽経験によるMOCR強度を検証した結果、ヴァイオリン専攻においてMOCRが強く働くことがわかった。ヴァイオリン専攻とピアノ専攻を比較し、ヴァイオリン専攻の音響曝露に対する抑制について考察する。